

令和6年度 結果の分析及び今後の改善策

(中間 (最終))

昭和北中学校区 校番 22 学校名 呉市立昭和西小学校

重点	d 中期(3年間) 経営目標	e 短期(1年間) 経営目標	l 結果の分析 (結果と課題をこう考えます)	m 今後の改善策(案) (こう改善します(案))
*** ① 確かな学力	基礎的・基本的な学力の定着を図り、主体的に問題や課題と向き合う児童を育成する。	基礎的・基本的な学力の定着を図る。 新しく習得した知識や技能を使おうとする児童を育成する。	・学力に課題がある児童の割合は、国語科7.4%、算数科13.8%であった。【中間 国語科7.3%、算数科11.2%】 ・国語科は、課題のある児童は固定しているものの、全体的に基礎学力は定着している。 ・算数科は、朝学習やQubenaの計画的な活用を行ったが、2学期の学習内容が難しかったことで前学年までのつまずきが複雑化した影響が見られた。 ・授業のユニバーサルデザインに取り組んだ単元の学習は、評価問題の通過率が高かった。そのことから、「分かる・できる」授業を実践するには、授業のユニバーサルデザイン化を行うことが有効であるといえる。しかし、研修や実践交流が十分にできていない。教員の授業力向上のための研修の時間を確保することが必要である。 ・短期経営目標に対する児童の割合は91%であった。 ・「単元で付けたい力を明確にした授業や課題探究的な学習を取り入れた授業に取り組んだ」と肯定的に答える教職員の割合は100%であった。 ・学習したことを活用する場面を考えながら学習している児童の割合は87%であった。【中間 85%】 ・9月に行った授業研究を検証し、その結果を職員全体で共有し、それを基に自らの実践に生かすことができていた。	・算数科においては、レディネステスト等で課題をしっかりと把握し、効果的な指導の在り方を学年で検討する。 ・朝学習の時間に基礎学力の定着を図るために、課題のある単元の学習を1週間単位で繰り返し行う。 ・本年度の検証授業の結果を踏まえ、呉市が示す授業モデルを基盤とした授業づくりの中でも、まずは視覚支援を重点的に行う。 ・授業におけるユニバーサルデザインの研修の時間を確保する。(全ての児童が「わかる・できる授業」の実現) ・引き続き各自の取組内容をタブレットで共有し、研修を深める。 ・タブレットに入れられた各自の実践を紹介する場を定期的に設け、「分かる・できる授業」の在り方を全体で共有し、自分の実践に取り入れる。 ・「単元で付けたい力を明確にした授業」や「課題探究的な学習を取り入れた授業」について、職員室で気軽に相談したり話したりできる場や雰囲気づくりに努める。 ・単元の学習のつながりを常に意識して、系統立てて指導を行う。
** ② 豊かな心	児童の自己指導能力を育成する。	社会性を涵養するとともに自己有用感を養う。 規範意識を育成する。	・児童アンケートで、「自分にはよいところがある」児童の割合は87%、「自分は役に立っている」児童の割合は87%であった。養護教諭による、レジリエンスを高める授業を行うことで、児童が自身自身を認めることができる効果があったためと考えられる。 ・行事後の学年をこえた認め合いや教師の肯定的な声かけにより、全体的に中間より肯定的評価が上昇した。自己有用感の低い児童が固定化していることが課題である。 ・学習発表会の鑑賞、縦割り班集会など異学年交流を行うことができた。 ・毎月の生活目標ができていた児童は、89%であった。 ・生活目標に対して、各クラスに合った取組を考えることで、意欲的に取り組むことができた。 ・「もくもく掃除ができていた」児童の割合は95%であった。 ・2学期も、もくもく掃除を意識させた。児童同士でアドバイスさせ合うことで、時間いっぱいそうじをしようという意識が高まった。しかし、掃除時間、課題のある児童への対応ができていない実態がある。	・各クラスで行った認め合いについて、実践を交流する場を設け、職員が取組を共有していく。 ・引き続き、縦割り班そうじでは、担当の児童の頑張りをしっかりと評価していき、色々な先生から認められる場を多く設けていく。また、担任にも伝え、担任もしっかりほめていく。 ・児童が主体的に活動できる係活動の工夫を行い、定期的に係活動の振り返りを行う。 ・引き続き、生活目標の振り返りを帰りの会等で行っていく。目に見える形で結果を残していき、自信につなげていく。 ・もくもく掃除をすることを意識させていく。また、課題のある児童については、連絡会議等で共有し、連携を図ることを継続する。 ・廊下、階段など児童の目に付きやすいところにポスターを掲示していく。
* 健やかな体	健康な体をつくり自分の命は自分で守る力を身に付ける。	体力・運動能力を向上させる。 災害や交通事故から自分の命を守る意識を高める。	・上体起こしは、家庭学習で取り組み、ソフトボール投げは、運動委員会を中心に「投げる力をのぼそうの会」を実施し、12月に再度測定を行った。平均を下回った児童の割合は、上体起こし35%・ソフトボール投げは52%であった。【中間 上体起こし54% ソフトボール投げ61%】 ・6月に測定した時よりも、特に1・2年生の記録の伸びが大きかった。運動委員会の取組で、より多くの児童に対して個別支援ができたこと、児童が2学期に種目を絞って重点的に取組を行ったことで記録が伸びた児童が増えたと考ええる。 ・くれ・チャレンジマッチは、種目や期間を設定し取り組んだ。委員会児童の呼びかけ動画によって、児童の意欲も高まったと考ええる。 ・校区で起こりやすい災害や避難場所を知っていると答えた児童は全校で93.2%。ほとんどの学年で目標値は達成しているが、間違った回答や「分からない」と答える児童がまだ数名いる。 ・避難場所については、96.4%でほとんどの児童が理解できている。学年が上がるにつれて、「小学校」以外の避難場所を正確に答えていたり、避難の仕方や災害に対する備えなどについて詳しく記述されていたりしている。 ・4年生は2学期に総合的な学習の時間で防災について取組を行い、学習発表会で発表したことで防災に対する意識が高まったと考えられる。学校全体では、各クラスで防災についての指導を行い、各家庭にほけんだよりを配付したり、タイムライン作成の取組の声掛けをしたりすることができた。	・日頃から体の様々な部分を動かす運動を、これからも継続的に行う。(家庭学習に取り入れる。毎時間の体育で、はじめにサーキットを行い、習慣化する。) ・くれ・チャレンジマッチでは、児童がさらに意欲的に取り組めるように、順位を示して校内や他校との比較をしていく。また、今後も定期的に取組ができるように教職員に周知していく。 ・今後も繰り返し指導を行うことで、防災に対する意識を児童に常にもたせていく。また、日頃からニュースなどの防災に関する情報を話題として取り上げるように教員は意識していく。 ・「ひろしまマイ・タイムライン」の管理や活用方法について学校で再度意識統一をしていく。(1・4年生は新年度に配付される。それ以降は個人ボックスに入れて持ち上げる。) ・避難訓練の時、事前に災害についてタブレットで動画やスライドを視聴して学習を行った。言葉だけでなく、映像を見ることが低学年もイメージをもつことができるので、(配慮しながら)今後も続けていく。 ・土砂災害対応携帯マニュアル「ひろしまマイ・タイムライン」の活用方法は難しいが、今年度も外部講師の依頼をし、授業を行った。また、地域人材を用いた授業も行うことができた。今年度の取組を参考にしながら、来年度も計画をしていく。
業務改善	持続可能な教育環境を整備する。	長時間勤務を削減する。	・業務の見直しを進めてはいるが、45時間を超えなかった教職員9月54.5%、10月40.9%、11月54.5%、12月82.0%と、十分な改善ができていない。 ・目標達成はできなかったが、前期と比較すると達成度は約23ポイント上昇し、改善傾向が見られた。	・時程の大幅な見直しと改善を行い、職員が授業以外の業務を行う時間を確保する。 ・主任を中心とした組織的な人材育成を継続して推進し、職員の主体性を活かした業務改善を進める。